

タージ・マハル

特許審査第四部長 櫻井 孝

自分はインド在勤の3年間にタージ・マハルを13回訪れた。これくらい見に行くと、贅沢な話ではあるがタージ・マハルは自分の中で極めてありふれた存在になってしまう。だからこのコラムでもこれまでタージ・マハルの話は取り上げてこなかったのだが、考えてみればインドに旅行に行こうとするとけっこうたいへんだ。ということで、今さらの観もあるが、今回はタージ・マハルについて紹介してみたい。

インドと言えばまずはタージ・マハルを思い浮かべる人は多いだろう。写真も含め、そのなんたるかについては非常に多くの書物に紹介されているから、ここで詳述するのは避けるが、要するにムガル王朝第五代皇帝シャー・ジャハーンが最愛のお后ムムターズ・マハルの廟墓として建築したものである。シャー・ジャハーンは領土拡張のための戦いに明け暮れたが、当時はそういった戦いに出る際にはたとえ身重であってもお后を同行させたそう。14番目の子供を宿していたお后は、遠征先で出産したものの、その直後に落命する。1631年のことだ。悲嘆に暮れたシャー・ジャハーンは、翌年からお后のために世界一のお墓を造ろうと、ムガル帝国が首都としてきたアグラにてタージ・マハルの建設に取りかかる。そして、巨費を投じてインド国内はもとより国外からも多くの建築資材や貴石の類を取り寄せ、22年の歳月をかけてタージ・マハルを造り上げたのである。「タージ・マハル」の意味については諸説あるらしい。自分がインドで聞いたのは、タージとは王冠、マハルとは宮殿を表す言葉、ということであるが、それからすれば「王冠のような宮殿」ということであろうか。

タージ・マハルは聖なる河・ヤムナ川の岸辺に建てられているが、シャー・ジャハーンはヤムナ川を挟んでその対岸に自分の廟墓をも造らせようとした。タージ・マハルが白大理石で造られているのに対し、自分の黒大理石でまったく同じ形のものを対照的に造ろうとしたのである。しかし、既にタージ・マハルの建築に巨額の富をつぎ込んだことを憂いた息子に帝位を追われ、シャー・ジャハーンはアグラ城に幽閉されてしまう。アグラ城を訪れた際にガ

イドを雇うと、必ずシャー・ジャハーンが幽閉されていたという部屋に案内される。そこは見晴らしの良い部屋で、タージ・マハルが一望にできる。しかし、ベッドの向きのせいだろうか、ガイドの説明によれば、シャー・ジャハーンは柱に鏡をかけ、そこに写ったタージ・マハルを眺めながらやがて息をひき取ったと聞いた。

タージ・マハルはあらゆる面から見て左右対称に造られている。王妃の棺は基壇の上、中央のドームの真下にそれらしき立派なものが置かれているが、実はこれは見せかけのもので、実際の棺は基壇の下に造られた石室の中央部に置かれている。これもまた左右対称性を保っている。しかし、この石室の中に唯一左右対称性を破るものが存在する。それは、シャー・ジャハーンのお墓だ。自分の廟墓を造ることを禁じられたシャー・ジャハーンは、死後、ムムターズ・マハルの棺の横に葬られることを許される。彼の棺は基壇の下の石室の中、ムムターズ・マハルの棺の隣りに納められた。観光に訪れて石室の中に入った時、これだけが壮大なタージ・マハルの建築物の中で左右対称性を破っている





【図1】1935年5月6日に発行されたジョージV世在位25周年記念切手7種のうちの1枚(ギボonz#244)。



【図2】1949年8月15日に発行された第1次普通切手のうちの1枚(ギボonz#322)。



【図3】1967年5月19日に発行された国際観光年記念切手(ギボonz#545)。

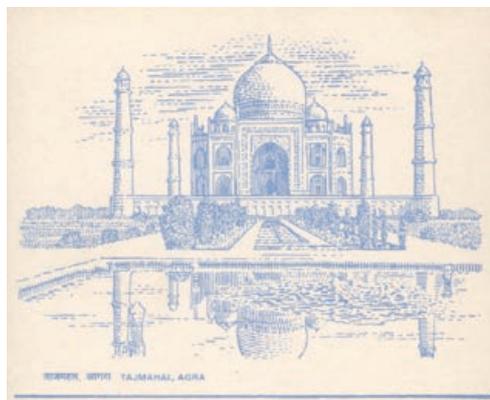
のだ、でもシャー・ジャハーンは幸せに違いない、とガイドは説明してくれるはずだ。

アグラはニューデリーから200キロほどの距離にあるから、ニューデリーから車をとばせば4時間ほどで行くことができる。インド人はアグラ・ハイウェイと呼んでいたが、ハイウェイとは名ばかりで、人も歩けば牛車もラクダも水牛も通るといふ道である。中央分離帯もないから、前を行く車を追い越そうとした車が中央ラインをはみ出し、対向車と正面衝突するような事故はしょっちゅう起きている。アグラまで行く間にそういうすごい交通事故の犠牲車があちこちの路傍に放置されている。それだけ危険を伴う旅である。デリー駅からアグラ行きの鉄道も出ているので、今はそちらのほうが勧められるのかも知れない。

真夏(4月~6月)にタージ・マハルを訪れると、照り返しもあって白大理石の基壇の上はおそらく50度を超えている。太陽は容赦なく照りつけるが、写真などで見てわかるように広大な敷地内に遮蔽物は何もない。実際、自分が初めてタージ・マハルを訪れたのは6月の盛夏だったから、美しさなんかそっちのけで、二度と来るもんかと思ったものだ。ところが1月、2月になると、ニューデリーもアグラも朝夕は皮ジャンパーが必要なほどに気温が下がる。空も青く澄み渡っている。そんなときのタージ・マハルは実に優しく迎えてくれる。何度訪れてもいい、と思わせてくれるのである。訪問するならばその時期によって印象が180度変わることを記憶しておくべきだ。

さて、インドにとって大切な観光資源のタージ・マハルであるが、1992年までにインドの切手のデザインに取り上げられたのはたったの3回しかない。そのほか、1989年に国際切手博覧会がニューデリーで開催されるのを記念して、前年に官制絵はがき7枚セットが発行され、その絵はがきのデザインの中にタージ・マハルも取り上げられたが、それを含めても4回だ¹⁾。

最初に切手に取り上げられたのは、インド皇帝を兼ねていた英国王ジョージV世の在位25周年の記念切手だ(図1)。1935年発行の7枚のうちの1枚に描かれている。次はイン



【図4】1988年12月1日に発行された国際切手博(1989年開催)の記念官制絵はがき7種のうちの1枚の図柄部分。

ド独立後、1949年に発行された第1次普通切手の1枚として(図2)。3回目は、国連の第21回総会において1967年を国際観光年と定めたのを受け、これを記念して同年に発行された切手のデザインとして取り上げられている(図3)。やはり、インドで観光と言えばタージ・マハル、ということなんだろう。

さて、前述した官制絵はがきの図柄(図4)も含め4枚を並べてみると、1枚だけ絵が違うものがある。1949年の普通切手の図柄だ(図2)。他の3枚は、全てタージ・マハルを正面から描いたものである。タージ・マハルの写真と言えば、ほとんどがこの正面からとらえたものであろう。これに対し、1949年の普通切手の図柄は、真後ろからとらえたものだ。手前の水面はヤムナ川である。前述したとおり、シャー・ジャハーンはヤムナ川の対岸に黒大理石を使って自分の廟墓を建てようとして果たせなかった。そのヤムナ川の対岸からの眺めがこの1949年の切手にデザインされている。どうしてこのような珍しいデザインが選択されたのかは残念ながらわからないのだが、タージ・マハルにまつわるロマンスを知っている者としては、なんとも粋な選択であるように思える。

1) そのほか、背景にタージ・マハルが描かれたものは、例えばギボonz#1104(1983年)等に見られる。